

コロサイ人への手紙3章1節「上を向いて歩む」

1A よみがえられた後のキリスト

1B 栄光に戻られる方

2B 御国を受け継がれる方

2A 御子の即位に震える敵

1B ソロモンの即位

2B 子への忠誠

3A キリストの内にあるいのち

1B キリストと共のよみがえり

2B キリストと共の栄光

4A 上にあるものの追い求め

1B 地に属するもの

2B 肉の弱さにあるうめき

3B 肉の内に隠されているいのち

4B 栄光の内に現れる希望

本文

コロサイ人への手紙 3 章を開いてください。私たちの聖書通読は 2 章まで来ました。午後に 3 章を一節ずつ見ていきたいと思います。今朝は 3 章 1 節を中心に見ていきます。「**こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。**」

パウロは 3 章にて、地上におけるキリスト者としての歩みについて語り始めます。これまでは、キリストについての教をパウロは書いてきましたが、その真理にしたがって生活の中でも生きていくことを教えていました。ここが、コロサイの町にはびこっていたグノーシス主義などの考えとは、大きく違っていました。知識を持つことが大事とされて、生きる態度については問われなかったのです。また、異教の神々も同じです。神々に仕えることは、自分に災いが来ないようにする手段でありましたが、自分の生活様式を変えるものでは全くありませんでした。けれども、キリスト者はキリストの似姿に、神の御霊によって変えられるものです。神の子どもになったということは、神に似た者になっているということです。

1A よみがえられた後のキリスト

そこで、パウロは、キリスト者の歩みとはどのような存在なのかを教えてください。存在を教えて、それで歩みを教えてください。自分が誰であるかを知ることによって、それにふさわしい歩みを自ず

とすることができます。自分が行いを積み上げて、何かになるのではありません。自分に子どもが生まれたら、親として生きますね。子を持っている親であるから、子に対して親としてふるまいます。子ども、親から生まれたから、その生んだ人を敬い、従うのです。結婚も、自分がある人に自分を尽くして、それでようやく結婚するのではなく、結婚をしたから、伴侶に一生涯、自分の身を献げます。存在があって、それでそれにふさわしい歩みがあります。

そこで、キリスト者は、パウロは「キリストについている者」という存在、アイデンティティーを教えてください。「2:12 バプテスマにおいて、あなたがたはキリストとともに葬られ、また、キリストとともによみがえらされたのです。」古い、罪に支配された自分はキリストと共に死に、葬られました。そして、この方のよみがえりと共に、新しい性質が与えられました。キリストと共によみがえらされたのです。それでパウロは、3章1節で「あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら」と言っています。

そして、共によみがえらされたのなら、「**上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。**」と言っています。今朝はここが中心になります。キリストは、よみがえられて地上にずっとおられたのではありません。天に昇られて、神の右の座に着かれました。そのキリストのうちに、私たちは生きているのです。「エペソ 2:6 神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。」

「上を向いて歩こう」なんていう歌が、昔、大ヒットしました。涙が出そうになった時に、上を向いて歩こう、星を数えて、幸せは雲の上、空の上に。悲しみは星の影に、月の影に隠れる、というような内容ですね。独りぼっちになっている時、夜の時に上を向いて歩こう、というような内容です。確かに、そこには神の造られた星や月があり、宇宙の偉大さを思えば、今、自分が苦しんでいること、悩んでいることが小さく見えますね。神の造られた栄光が、月や星に現れています。

しかし、私たちキリスト者は、もっともっと積極的に上を向いて歩むことができます。宇宙を思い巡らすだけでなく、天におられるキリスト、神の右に着いておられるキリストを信仰によって見ることができるからです。それは、激しい迫害のただ中でも同じです。ステパノの殉教を思い出してください。「使 7:55-56 しかし、聖霊に満たされ、じっと天を見つめていたステパノは、神の栄光と神の右に立っておられるイエスを見て、「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます」と言った。」そして人々が石打にしましたが、ステパノは彼らを罵ることをせず、「主イエスよ、私の霊をお受けください。」そして大声で叫びました。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」主イエスと全く同じ道を辿ったのです。

教会の歴史で、聖人と呼ばれる人々が描かれている絵は、右斜め 45 度の方向を見えています。また、江戸時代の禁教時代、潜伏していたキリシタンは信仰を保っていましたが、おそらく、聖歌からのものと言われて、オラショと呼ばれる祈りの歌が代々、引き継がれていたそうです。苦しみの中にあっても、祈りと賛美が人々の信仰を支え、そして、その賛美は必ず、神の右に座しておられるキリストを思っているものです。



1B 栄光に戻られる方

イエス様は、ご自身がよみがえることだけでなく、それ以上に、ご自身が初めに持つておられた栄光の中に入ることを、何度となく語っておられました。ヨハネによる福音書は、特に顕著です。イエス様が捕らえられる前に、父なる神に向かってこう祈られました。「17:5 父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前にいっしょに持つていたあの栄光を。」そして、イエス様はよみがえられて、マグダラのマリアにお会いになりました。彼女がイエス様だと分かると、「ラボニ」と言って、しがみつきました。そこで主はこう言われました。「20:17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないのです。わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」ご自身が父なる神のところに入ることを、兄弟たちに伝えなさいと言いつけておられます。

イエス様は、大祭司カヤパの前で、「だが今から後、人の子は力ある神の右の座に着きます。」と証言されました(ルカ 22:69)。使徒ペテロは、他の弟子たちと共に確かに、イエス様が天に昇られる姿を見て、その後、聖霊が注がれて、ユダヤ人たちに力強く証言しました。「使 2:32-33 このイエスを、神はよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。」主のよみがえりは、まさに王である神の子が、よみがえりによって確かに御子であることが公に明らかにされたことを表します。そして、この方が天に上げられたのは、確かに王の右の座についたことを示すものです。

2B 御国を受け継がれる方

主が神の右の座に着いておられるのは、すべての権威や支配というものが、この方の足もとでひれ伏していることを示すのです。確かに王子として、世継ぎの子として即位したことを示すものなのです。先ほど朗読した詩篇 110 篇に、その姿が現れています。「1 【主】は私の主に言われた。「あなたはわたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」2 【主】はあなたの力の杖をシオンから伸ばされる。「あなたの敵のただ中で治めよ」と。3 あなたの民はあなたの戦いの日に喜んで仕える。聖なる威光をまつて夜明け前から。あなたの若さは朝露のようだ。4 【主】は誓われた。思い直されることはない。「あなたはメルキゼデクの例に倣いと

こしえに祭司である。」5 あなたの右におられる主は御怒りの日に王たちを打ち碎かれる。」主が今は、右の座に着いておられます。そして、私たち聖徒たちの祈りを聞き、父なる神に取り入ってくださいています。祭司のように執り成してくださっているのです。そして、立ち上がり、敵どもをご自分の足で踏みつけられるのです。それが、再臨、イエス様が地上に戻って来られる時です。

2A 御子の即位に震える敵

上にあるものを求めるというのは、すべての支配や権威が、キリストの全権の中で震え上がっていることを意味していることを知ってください。私たちは 2 章で、私たちが恐れの中に閉じ込める、悪の勢力どもが、凱旋の行列の見せ物にされているところを読みました。「2:15 そして、様々な支配と権威の武装を解除し、それらをキリストの凱旋の行列に捕虜として加えて、さらしものにされました。」私たちが地上で生きていく中で、それらの力がどれほど強いと思えても、主ご自身が圧倒的な勝利者であることを知ることは、とても大事なのです。

1B ソロモンの即位

ダビデの子、ソロモンの即位のことを思い出しましょう。ダビデは年を重ねて老人になっていましたが、息子アドニヤが自分が王になるとして野心を抱きました。これまでダビデに仕えていた者たちが、アドニヤにつきましました。将軍ヨアブ、祭司エブヤタルは彼を支持しました。そして、人々を招いて祝宴をしました。ソロモンは招かなかったのです。

そのことを知った預言者ナタンが、まずソロモンの母バテ・シェバのところに行き、ダビデのところに行く必要を説きました。ダビデはソロモンが王位に就くことを約束していたのです。それで、バテ・シェバが王の前に出ていき、その後でナタンが出て行きました。それでダビデは、ナタン、祭司ツアドク、それからベナヤという軍人を呼び寄せ、ソロモンが即位できるように指示を与えました。それで、ソロモンはギホンのところで即位し、人々は「ソロモン王、万歳」と叫んだのです。それを聞いた客の反応ですが、「アドニヤの客たちはみな身震いして、それぞれ帰途についた。」とあります（I 列王 1:49）。そしてアドニヤは、祭壇の角をつかんで、命拾いをしました。

しかし、ダビデが死に、ソロモンが着任すると、ソロモンは正しい裁きで、アドニヤ、ヨアブを殺しました。祭司エブヤタルは罷免しました。こうして、敵どもがソロモンにある権威と力の前で身震いし、最後は裁かれるのです。

2B 子への忠誠

諸々の支配や権威、力が空中にいる中で、キリストが神の御子として右の座に着いておられるというのは、こういうことなのです。敵どもが身震いして、自分たちが裁かれることをただ待っている二しか過ぎないのです。

そこで私たちに必要なのは、ちょうど、ソロモンの側についたナタン、バテ・シェバ、ベレヤなど、ダビデが命じたように、ソロモンが王になるということに忠誠をつくした人々のようになることです。世の流れがあります。しかし、神が選ばれたのはキリストなのです。キリストにこそ全権があり、これらの世の勢力は滅びるしかないのです。それが、パウロが言っている「**上にあるものを求めなさい**」という言葉です。ここの「求める」というギリシア語は、「熱心に求めて、心に定める」という意味合いがあります。世の流れに真っ向から抗っても、それでも上を見つめるということです。

3A キリストの内にあるいのち

1B キリストと共のよみがえり

私たちが、キリストに結ばれているということを忘れないでください。キリストが死なれた時に、私たちは死にました。自分はずでに死んでいるのです。しかし、自分のいのちは、キリストのうちに隠されています。(3:3)今は、ちょうど蝶のさなぎのように、私たちの肉体だけを見たら、そのいのちが見えないかもしれません。けれども、それでもその肉体の弱さの中に、キリストの栄光が現れるということです。死んでもよみがえる、キリストのいのちが、私たちの肉体の弱さに、キリストの恵みとして現れるのです。パウロは、コリント第二で、「土の器に宝石がある」ようにして喩えています。

2B キリストと共の栄光

そして、そのいのちが、キリストに結ばれている者として、この世にキリストが現れる時に現れます。「3:4 あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」私たちは、ちょうどさなぎが変態によって蝶になるように、隠れていたキリストのいのちが、私たちにも現れるようになります。神の子として、目で見える形でも、その栄光の姿で現れます。主が、世に対して戻って来られる時に、私たちのこの方についていつて現れるのです。そして、キリストが御国を受け継がれる時に、私たちも共に受け継ぎます。

4A 上にあるものの追い求め

そこでパウロは、3章で、地にあるものを思うのではなく、上にあるものを思いなさいと2節で勧めています。それを私たちが、どのように見分けていけばよいのでしょうか？

1B 地に属するもの

地に属するものとは何かを、列挙しています。「3:5 ですから、地にあるからだの部分、すなわち、淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝です。」性欲に関わることを列挙しています。性欲自体は神から与えられた賜物です。それを結婚によって結実させるように神は定めておられます。その結婚から外れたところで、情欲を燃やすことが、地にあるからだの部分であると、パウロは説明しています。

アメリカでは、一か月ほど前に、アズベリー大学というところで、御霊が力強く臨み、礼拝賛美の

集会在延々と続きました。アズベリー大学だけでなく、他のキリスト教の大学にも、聖霊のお働きが飛び火して、いろいろなところで御霊の注ぎが起こっています。その中で、罪の告白が行われています。人を赦せない苦々しい思いもありました。そして、ポルノを見続けていたという罪の告白もあります。地に属するものではなく、上にあるものを思っている時に、彼らが肉の行いを捨てることを告白したのです。

それだけではありません。8 節を見てください、「しかし今は、これらすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、ののしり、あなたがたの口から出る恥ずべきことばを捨てなさい。」口から出てくるものも、人を汚すのです。しかし今は、とパウロが行っていて、キリスト者として、これが地に属するものだと見分けることができず、妬みや争いを抱き、ちょうどユダヤ人の宗教指導者がイエス様や弟子たちを裁いたように、裁いているキリスト者が数多いです。ヤコブも手紙の中で警告しました。「3:14-15 しかし、もしあなたがたの心の中に、苦々しいねたみや利己的な思いがあるなら、自慢したり、真理に逆らって偽ったりするのはやめなさい。そのような知恵は上から来たものではなく、地上のもの、肉的で悪魔的なものです。」

2B 肉の弱さにあるうめき

このように見分けていくことが大事です。次に、肉の弱さにあるうめきに、主は決して見逃しておられません。むしろ、そのためにキリストは肉体を取ってこられて、肉体の弱さに同情しておられるのです。私たちが、上のものを見て、求めている時に、そこにある、言葉にならないうめきをも知って、執り成してくださるのが御霊です。「ロマ 8:26-27 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。人間の心を探る方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなしてくださるからです。」

肉の誘惑に勝てないとして悩んでいる人は、自分がはたしてキリスト者なのかと悩む人が多いです。いや、その反対です。「悩んでいるからこそ、うめきがあるということ。だから、キリスト者であることの証し」ということです。もし悩みがなければ、その人は果たして御霊によって、生まれているかどうかを疑わないといけませんね。

3B 肉の内に隠されているいのち

そして、上のものを求めている中で、私たちはこの弱き肉にあっても、よみがえりのいのちが働いて、私たちが、キリストがそうであるように、生きることができるのです。「ロマ 8:10 キリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、御霊が義のゆえにいのちとなつています。」

私たちは、この数々の証しを持っているのではないのでしょうか？自分にあった、どうしようもできない悪癖があります。そのことを悩んでいました。どうして、キリスト者なのに、こんなことをしてしまったのだろうか？と思います。しかし、しばらくの時が経って、同じような状況の中で、肉に反応しないでいたという経験です。いつも、悪口を言わないと生きていけなかった人が、いつの間にか悪口が気持ち悪くなり、いえなくなっていったという経験は？恐れによっていつも、人と距離を取っていた人が、神の愛に触れて、人々に親切にすることができるようになっていたという経験。仕事で強欲であり、家庭を顧みない男が、妻と子供を大事にするように変えられたという経験。いろいろあるでしょう。自分の内に、そんな変える力はないのに、いつの間にか変えられている自分を発見します。いや、発見していないままで、他の人に指摘されて自分が変わったことを知ったということもあるでしょう。

4B 栄光の内に現れる希望

このように、キリストのよみがえりのいのちが働いています。そして、主が再び来られた時に、キリストがよみがえり、栄光の姿に変えられたように、私たちも変えられる時が来ます。その希望によって、私たちは今を耐え忍ぶことができます。「Iヨハ 3:2 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。」キリストに似た者になります！

ですから、私たちは上を向いて歩まないといけません。この方が全能の神の右の座についておられます。この方の前には誰も敵対できません。この方が注がれた御霊は、私たちの内に確実に働いておられます。この方に導きに導かれましょう。古い人は、死んだままにしておきましょう。そして、今は終わりの時です。悪魔が最後のあがきをしています。私たちを滅ぼそうと虎視眈々と狙っています。しかし、私たちが、キリストが御座におられることを知って、この方を見上げているときに、必ず勝利します。なぜなら、すでにキリストは圧倒的に勝利しておられるからです！